

序

解剖学的部位を同定したり、血管が関与する疾患を理解するためには、血管解剖の基礎的知識が必須である。

解剖学的部位の同定に血管解剖の知識が必要とはどういうことであろうか、それは、解剖学的区分(地図)の多くが血管分岐を目印として境界を定義していることに起因している。そのため、取り上げたい画像所見の存在部位を記述するためには、標準的な(正常な)血管の走行を理解しておく必要がある。

しかしながら、その過程において、標準的な血管走行からの逸脱を知っていないと、そもそもの場所を特定する地図が描けなくなってしまう。いわゆる血管破格は胎生早期に存在する原始的な血管網が正常に退縮せずに遺残したり、逆に残るべき本来の血管が消えて代償的な側副血行路が形成されたりして生じる。その場合の解剖学的な領域区分は、他の解剖学的構造を指標にするしかなくなる。例えば、骨の形態的特徴、気管・気管支や消化管などのその他の管腔構造の分岐や、筋膜などの膜構造の付着部や境界などである。

一方で、疾患の局在や、血行動態を含めた病変内部の性状は、血管分布に大きく依存しており、その規定による影響は大きい。血管走行を知ることで、血管が関与する疾患の顔つき(病態生理)が見えてくるのである。

このように血管解剖の知識は、生体の正常像(解剖学的区分)と疾患(病態生理)を理解する土台となる。血管解剖の全体像を理解することや、血管解剖と疾患との関連を知ることはきわめて重要である。そのためには体の各部位で統一されたコンパクトなまとめがあると、読者の理解に役立つと考えた。以上の構想から、本増刊号では学者の学習契機やガイドになり、なおかつ上級者の知識整理にも重宝する、実用的な一冊を目指している。本書の特徴としては、段階的な比較理解ができるように構成されていることにある。まずは手堅く、標準的な地図としての正常解剖を押さえてもらうところから始まる。次に、そのバリエーション(正常変異・破格)を理解して、多様性の神髄に触れてもらいたい。この段階でも十分に興味深く学んでいただけたと思う(個人的には正常破格だけで一冊の企画にしたかったが、さすがにこだわりが強すぎるかと思い断念した)。そして具体的な疾患に応用されると、どのような画像所見になるのか提示してもらった。このように標準→破格→疾患と、順を追って同じ血管の顔つきの百態を比較することで、今まさに読影している画像における病態の理解が深まると思う。

日常臨床に役立つ読影の虎の巻として読者の皆様が本書をいつも手元にたずさえてくれるならば、存外の喜びである。

2025年8月

自治医科大学医学部 放射線医学講座

森 壘